

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2024年10月30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 京都大学医学研究科脳病態生理学講座(精神医学)

職名・学年 研究員

氏名 戴 琪(ダイキ)

助成の種類	令和6年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	第5回ヨーロッパ依存行動および依存症会議(Lisbon Addictions 2024)			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	Resilience and Sense of Coherence as Mediators in the Association between Problematic Mobile Phone Use and Depression			
開催場所	ポルトガル・リスボン・リスボンコンGRESセンター			
渡航期間	2024年10月21日 ～ 2024年10月27日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000	円	
	使用した助成金額	350,000	円	
	返納すべき助成金額		円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費目	金額(円)	
		航空運賃	228,399	
		宿泊費	88,355	
		滞在費(日当)	33,246	
		学会参加費		
その他				
	以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 京都大学教育研究振興財団からいただいた助成金のおかげで、大変充実した時間を過ごすことができました。非常に迅速にご対応いただきましたおかげで、安心して渡航準備や学会発表の準備を進めることができました。心より感謝申し上げます。			

成果の概要/戴 琪

1. 国際研究集会について

今回報告者が参加した「第5回ヨーロッパ依存行動および依存症会議 (Lisbon Addictions 2024)」は、2024年10月23日から25日にかけてポルトガル・リスボンで開催された。この会議は依存症に関する研究者や実務者が集まり、最新の研究成果や実践的な知見を共有することを目的とした国際的な集会である。発表形式は口頭、ポスター、ワークショップがあり、多様なトピックが扱われた。特に、新型行動依存（携帯電話依存、ネット問題使用、ゲーム依存など）に関する研究が多く注目を集めた。

2. 研究発表と参加の成果

報告者は、会議の初日にポスターセッションにおいて、「Resilience and Sense of Coherence as Mediators in the Association between Problematic Mobile Phone Use and Depression」という題目で発表を行った。本研究では、携帯電話依存とその関連するうつ病症状において、レジリエンスおよび首尾一貫感覚がどのように影響を与えるかを探った。発表では、82名の被験者から得られたデータを基に、統計的解析の結果を示し、特にレジリエンスと首尾一貫感覚が携帯電話依存からうつ病症状への媒介効果を持つことを報告した。参加者の方々からいくつかの質問や意見をいただき、活発な議論が展開されました。特に、携帯電話使用のリテラシーや心理的リソースに関する話題についての関心を感じ、研究の重要性を再確認する機会となりました。

また、会議ではヨーロッパとアジアにおける新型行動依存（携帯電話依存、ゲーム依存など）の心理的メカニズムの共通点や違いについても議論されました。これにより、政策面での変化や各地域でのアプローチの違いについての理解が深まり、今後の研究や実践におけるヒントを得ることができました。特に、ヨーロッパの研究者たちとの直接的なコミュニケーションを通じて、異なる視点からの意見やアプローチを学ぶことができたことは、非常に貴重な経験でした。

海外学会参加は若手研究者にとって非常に緊張する課題ですが、実際に体験すると、示唆に富むディスカッションと交流によって研究を続けるためのモチベーションや新たな研究の視点を得られる貴重な機会であることを再認識しました。この経験を基に、次の研究課題の提出について考慮しているところです。

3. 謝辞

今回の国際研究集会に参加できたのは、京都大学教育研究振興財団の助成があったからに他ならない。助成金は主に渡航費用として使用させていただき、貴重な国際的な研究の場で自らの研究を発表する機会を得ることができ

たことに深く感謝申し上げます。この経験を通じて、今後も研究の発展に寄与できるよう、努力していきたいと考えている。